

眉村卓



TOKUMA NOVELS 長篇青春冒険ロマン

不定期エスパー

3

《カイヤツⅢ》
《査問》



TOKUMA NOVELS

眉村 卓

不定期エスパー **3** （カイヤツⅢ）
（査問）

発行者 荒井 修

発行所 徳間書店

東京都港区新橋四ノ一〇 郵便番号一〇五

電話四三三・六二三一 振替東京四一四四三九二

©Taku Mayumura 1988

落丁・乱丁はおとりかえいたします

Printed in Japan

〈編集担当 磯谷 励〉

ISBN4-19-153797-0

眉村卓

TOKUMA NOVELS 長篇青春冒険ロマン

不定期エスパー

3

〈カイヤツⅢ〉
〈査問〉



0 C0293 P700E(1) 定価=700円
(本体=680円)



不定期エスパー^{ふていき}3・眉村卓^{まゆむらたく}

収録分は、一九八三年九月号から一九八
丁九月号にわたって『SFアドベンチャー』
掲載された。物語は、この巻で大きな節目
を迎えることになる。次巻からは、さらに大
、物語が展開する。御承知の通り『不定期
エスパー』は、大詰めに向かって現在おおい
りあがっている。声援を送って欲しい。

TOKUMA NOVELS



長篇青春冒險ロマン

不定期エスパー

3

〈カイヤツIII
査問〉

目村卓



心間書店

TOKUMA NOVELS

目次

カイヤツ
III

7

査問

121

本文挿画・小林智美

カイヤツ III 一

モーリス・ウシエスタと会う日がきた。

ぼくは当日の朝になってから、その日の午後は待機
非番だと聞かされ、併せて、午後三時半に警備隊長室
へ行くよう、ヤド・パイナンにいわれたのである。

「ひとりですか？」

と、ぼくはたずね、ヤド・パイナンは無表情にそう
だと答えた。

ぼくがそんなことを訊いたのは、やはり頭の中に、
総大将に呼ばれた一兵卒というイメージがあったから
だ。ふつうならそうした場合、誰か上級者が連れて行
くものではあるまいか？

それを……本人が勝手に行けというのは……エレス
コブ家警備隊の能率主義のあらわれなのか（エレスコ
ブ家警備隊にはひどく形式的・事大主義的なところがある
反面、結構直接的で単純なやりかたをする部分もある
ことが、今のぼくにはわかって来ていた。これは

家の警備隊というものが、その性格上そうした両面を
持たざるを得ないのだろうし、さらにはエレスコブ家
の警備隊が、上位の家々におけるほど大きくはなく、
さりとて弱小の家々ほど小規模ではないという事情も
働いているに違いない）……あるいは、現在のエレス
コブ家警備隊には、ぼくに他の隊員を付き添わせるよ
うな余裕などないのか……それともぼくに都合良く考
えれば、ぼく自身が手間のかからぬ一人前の隊員と評
価され、自主性を認められたのか……いくつもの理由
が想定出来る。そしてそれらのどれもが、ある程度は
当たっているのかも知れない。

だが、もちろんぼくはそんなことまで問うつもりは
なかったし、ヤド・パイナンも何の注釈もつけなかつ
た。

午前中、エレンの部屋の前の立哨をしたぼくは、エ
レンの顔を見ることなく交代し、護衛部に戻った。エ
レンが部屋から出て来てぼくを見掛ければ、ひょっと
したらモーリス・ウシエスタが何の用でぼくを呼んだ
のか、その手がかりになりそうな言葉を投げてくれる
かも——との、かすかな期待もあったのだが……エレ

ンは部屋を出なかったのだから、仕方がない。いや、出て来たとしても、彼女が安易にそんな真似をしたかどうか……疑問である。

ともあれ。

昼食のあと、ぼくは少し自室の整理をしてから、早めに護衛部を出て、警備隊本部ビルに向かった。

足取りは落ち着いていたはずだが、ぼくの心はそれほど平坦ではなかった。

エレスコブ家警備隊の総帥であるモリス・ウシエスタが、なぜ一介の中級隊員のぼくを呼び出したのだろう、という不安が、いよいよ強くなって来るのだ。

モリス・ウシエスタとは、これまでに何度か会い、言葉を交したこともある。しかし、やりとりらしいやりとりをしたのは、初めてエレスコブ家に来たときだけであった。任命式の日にはなるほど彼の前に行ったけれども、一方的に声をかけてもらったに過ぎないし、あとはいずれも、遠い存在として離れた場所から眺めるのがつねだったのだ。

そして。

最初の出会いのさいとくらべると、ぼく自身のモ-

リス・ウシエスタに対する心理は、大きく変わってしまった。はじめは反射的に反抗的な応じかたをしたものだが（もつともそうだったのには、先方の態度にも原因がある）その後、いろんな事柄を見聞きするうちに、ぼくの印象や感じかたは、変化せざるを得なかったのである。

そうになったひとつのわけは、やはり、レクター・カントニオの忠告というか警告にあるだろう。研修のために与えられた部屋で、レクター・カントニオはぼくに、ぼくがモリス・ウシエスタにとって目障りな条件をいくつも備えているといったのだ。ぼくが常時でないにせよエスパイであること、ファイター訓練専門学校の優等生であること、エレスコブ一族の護衛員候補であること……すべてがモリス・ウシエスタにしてみれば不愉快であり信用しがたいものに映るはずだと、説明したのである。ただ、レクター・カントニオは、きみはこれを試練と見做すことも出来る、試練を突破し切り抜けたときには、成果はありきたりの道を経た場合よりずっと大きいだろう、ともつけ加えた。だからぼくは、ことさらそのことのみを意識したので

はないにしても、そのつもりで頑張ってきたのである。もしもモーリス・ウシエスタがそうした目でぼくを見ているのなら、それをはね返すだけの努力をしなければならぬ、と、無意識に覚悟していたはずである。そして、そういうことをつづけているうちに、ぼくの心中のモーリス・ウシエスタの像は、ちゃんと定位置を占め、そこからぼくをいつも監視しているような、そんなものになってしまったのであった。

わけは、まだある。ぼくはエレスコブ家警備隊の一員として、それもエレンの護衛員として務めるうちに、エレスコブ家警備隊のそれなりの力というものを、しだいに認識するようになった。それは外部からあまり関心もなく眺めていた家の警備隊の概念とは、かなり違っていたのだ。はつきりいえば、想像していたほどちやちなものではなく、単に金で雇われただけの集団でもなかったのである。家の警備隊とはまぎれもなく有機体であり暴力装置の一種であり、かつ共同体でもあった。それらを統括し指揮している警備隊長のモーリス・ウシエスタという存在が、ぼくの内側で大きくなっていたのは、当然の結果といえるのではあるま

いか。しかもその中でぼくは、メンバーのひとりとして融和しようと努め、そのような日々を過して来たのだ。自分が所属し仲間になろうとしている組織体の長としてのモーリス・ウシエスタの威圧感が重く強いものと化して来るのは、避けがたいことだったのである。

——とはいふものの、ぼくは例によっていつ襲われても対応可能な態勢を保ちながら進み……やがて、警備隊本部ビルの前に到達していた。

一階の受付で、自分の役職と姓名を告げ、警備隊長に呼ばれて来た旨を伝える。

あらかじめ連絡を受けていたらしく、受付にいた隊員は、そのまま十三階の警備隊長室へ行くように指示した。

ぼくは、階段をあがりはじめた。エレベーターを利用しても良かったのだが、ここにいたときはたいい階段を上り下りしていたので、馴れていたので。十三階を駆けあがるくらい、ぼくにとっては何でもないことである。

十三階に来た。

廊下を通って、合金製のドアの前へ——。

ドアの横に、上級隊員と初級隊員が立っていた。

「護衛部第八隊のイシター・ロウです。警備隊長殿に呼ばれて参りました」

ぼくが敬礼して名乗ると、ふたりの隊員は敬礼を返し、上級隊員が電磁錠を取り出してドアに当て、インターホンにいった。

「イシター・ロウが参りました」

「よろしい。入れろ」

モーリス・ウシエスタの太い声が流れ、上級隊員はドアを押し開ける。はじめてここへ来たときと同じ手続きだが……今のぼくには、それが、内部からと外部からの両方の施錠システムなのがわかっていた。もちろん内部の人間は、外部からの施錠の有無にかかわらず、内部からの解錠だけで、自由に外へ出ることが出来るのである。ぼく自身の個室のような指紋錠ひとつきりの部屋とことなり、ある程度以上の重要人物の部屋は、みなこうした半一方システムというべき構造になっているようである。

ぼくは中に入り、敬礼した。

モーリス・ウシエスタは、この前のように、広い室

の正面のデスクにいた。だがこの前と違ってウシエスタは軽く頷^{うなず}き、腰をあげながら部屋の右手の奥の応接セットを指して、いったのだ。

「よく来た。そこにすわるがよい」

「はい」

ぼくは答え、そっちへ歩み寄った。が……モーリス・ウシエスタがやって来て、腰をかけるのを待つてから、すわったのだ。

すわりながら……ぼくは、応接セットの横の棚に、据えつけ型の一般的な精神波感知機があるのを、見て取っていた。警備隊長の部屋というようなこんな場所にはあって当然……というより、なければならぬものである。ぼくが何となくひやりとしたのもたしかである。もちろん、ぼくが一瞥^{いちべつ}した限りでは、それは全く作動していなかった。

けれども、もうそのときには、ぼくはモーリス・ウシエスタに向き直り、相手の顔を注視していた。

ウシエスタは相変らず堂々とした体格で、はがねに似た目をこちらに向けている。だが、その顔にやや疲れが浮かんでいるように思えたのは、ぼくの気のせい

だろうか？　そういえば、モーリス・ウシエスタをこんなに近くから、ちゃんと観察したのは、これが最初なのだった。

それにしても……と、ぼくは、相手が三、四秒黙っているうちに、考えていた。警備隊長室に来て、こうして向かい合って腰をおろすというようなことになるとは、ぼくは予想もしなかったのだ。ぼくは多分、ウシエスタのデスクの前に直立して、質問に答えることになるのではないかと、想像していたのである。しかし、このことが何を意味しているのかはまだわからず、わからぬままに緊張して相手の言葉を待っているのは、苦痛であった。その苦痛が加速度的に高まって行き、ほとんど耐えがなくなったとき、ウシエスタは口を開いた。

「だいぶ落ち着いたようだな。はじめてここへ来たときは、警戒心のかたまりのようだったが」

「……………」

相手がいつているのは感想であり述懐だと解釈したから、ぼくは黙って、軽く頭をさげた。

「きょうは、お前と個人的な話がしたくて、それで呼

んだのだ」

と、ウシエスタ。

ぼくは返事の代りに相手の顔をみつめた。

「話というのは、お前の能力——不定期エスパーであることについてだ」

ウシエスタはいう。

そうか。

ぼくが呼ばれたのは、そのことだったのか。

そのときのぼくの脳裏をかすめたのは、いうまでもなく、この間のラスクル家の連中とのいざこざの折の、ぼくの不思議な活性化と充実感であった。あれがエスパー化だったのか否か、ぼくは知らない。エスパー化であり精神波感知機で感知出来るものであったなら、エレンの手首の感知機は作動したであろう。そしてそうなったことを闇から闇へ葬り去ってしまうためにエレンは感知機を捨てるかどうかし、パイナン隊長もそんなことを知らなかったことにしてしまったのである——という、あの疑念が、またよみがえって来たのである。モーリス・ウシエスタがここでぼくの超能力について語ろうというのは、そのことと関係があるの

ではないか？ ひよっとするとエレンなりヤド・パイナンなりから（実際にそうしたカモフラージュが行なわれたとしてだけでも）この出来事を聞いたウシエスタが、ぼくに、何かいおうとしているのではあるまいか？

しかしながら、これはつまるところ、ぼくひとりの疑惑であり臆測に過ぎない。従ってぼくは、自分のほうからそんな話を持ち出すことは出来ないのだ。臆測が的中しているとすれば、なおさらである。口にするのも禁物であろう。むろんぼく自身、喋る気もなかったが……。

「お前は不定期のエスパーだから、今後いつエスパー化するかわからない」

モリス・ウシエスタは、だが、そうしたことがあったのかなかったのか、ぼくには窺い知れぬ口調で話してしている。それでも、これまでのことには全く触れず、一般的ないいかたで、だ。「もしも勤務中にそうになったら、お前は直ちにそのことを直属上司に申し出て、非エスパーに還るまで勤務を離れなければならん。お前は護衛員だからな。それが定めだ」

「はい。よく承知しているつもりです」

ぼくは返事をした。そしていささか不安でもあった。ウシエスタがこんな切り出ししかたをするのは……やはり、あのときのことを咎めるためだったのだろうか、と、思ったのである。

が。

話は、違う方向へ行った。

ウシエスタは椅子に背中をあずけ、ゆっくりといったのだ。

「どうだ？ お前、超能力除去手術を受けようと考えたことはないか？」

超能力除去手術？

ぼくは、そのことを何回勧められたであろう。超能力をフルに活用するのならともかく、超能力に振り廻されるくらいなら……しかも常時エスパーでない不定期エスパーであるのなら……能力除去をしてもらうほうが、どれだけ有利になるかわからないぞ、と、何度いわれたことであろう。そして、そう、ぼくもそれを考えなかったわけではない。ぼくの父自体が能力除去手術を受けた元エスパーだったのだ。それにネイトII

カイヤツでは、いやネイトリカイヤツのみならずネブ
トーダ連邦の版図内では、エスパーよりは普通人のほ
うが、職業選択上ずっと有利な立場にある。不定期と
はいえなまじエスパーだったおかげで、ぼくは随分損
をして来たのだった。

それにもかかわらずぼくが能力除去手術を受けなか
ったのは、前にもいったが、ぼくなり理由によるの
だ。ぼくはエスパーだったからこそ、父母の死の瞬間
を、共有し得た。その能力を捨て去るのは、ぼくの父
母をはじめとするすべての思い出、自分の大切なもの
を放棄するように思えて、とても踏み切れなかったの
である。それと、ぼくはこの能力を保有しつづけるこ
とによって、いつかは知らないがいずれ、何かすばら
しいことがあるに違いない、という奇妙な気分がずっ
と存在しつづけているせいであつた。それが具体的に
何であるのかはわからないし、そんな気分がはたして
信頼していいものかどうか不明であるが……予感か
も知れないとの気もして、おのれの（乏しい、自分で
も制御しかねるものであるが）能力を消してしまふの
は残念だったのである。だからこそ、ぼくはファイタ

ー訓練専門学校で学んだ。エスパーであろうとなかろ
うと関係のない仕事に就くために、この道を選んだの
だ。

そしてまた、ぼくを採用したエレスコブ家も、その
ことは承知のはずであつた。

それを……なぜまた今ごろ……？

「ぼくは――」

いいかけようとするぼくを、モーリス・ウシエスタ
は片手を持ちあげて黙らせた。

「わしは、強制はしておらぬ」

「……………」

「とにかく聴け」

ウシエスタは、両手の指をからみ合わせてテーブル
に置いた。「わしがこんなことをいうのは、お前にと
っても、エレスコブ家にとっても、現在の状態よりは
お前が超能力除去手術を受けたほうが、あきらかに得
策と考えられるからだ」

「……………」

「わしの聞いている限り、お前はなかなかよくやって
いるようだ。エレン様の護衛員として、隊の連中とも

気が合っているという。これはエスパーとしては、簡単に出来ないことだ。それは認める」

ウシエスタはつづける。「しかし、たとえ不定期であろうと、お前がエスパーである以上、抜群の昇進は望めない。護衛員としてはむろんのこと、一般警備隊にいても、隊をひきいる士官にはなれないだろう。いつエスパー化するかも知れぬ人間に指揮を委ねることは出来ないからだ。お前に二級士官、いや一級士官になれる素質があるとしてもな」

「……………」

それはわかっていた。理屈からいっても、その通りなのだ。

「本来、エスパーがどこかの家の警備隊に入るとすれば、特殊警備隊が適任なのだ」

と、ウシエスタ。「だがその場合は当然ながら常時エスパーであることが必要だから、お前は失格だ。それに特殊警備隊員というものは仕事の性質上、他人を欺し裏切ることもしばしばやらなければならぬ。お前には務まるまい」

「——そう思います」

ぼくは答えた。

これまでにぼくは、特殊警備隊の仕事というものについて、何度か噂を耳にしていた。エスパーたちだけから成る特殊警備隊は、超能力を活用して、出来得る限りのことを要請される。その中には当然ながら、スパイ合戦も含まれているとのことであつた。そうした裏の裏の裏という攻防は必ずしも嫌いではなかったが、そのために他人を信じさせ裏切るのも平気になれるかといわれると……到底ぼくには出来ないであろう。第一、ぼくは常時エスパーではないのだ。

「エレン様からお伺いしたところやエド・パイナンの話によれば、お前は持ち前の気の強さと真面目さで、ずっとやって来たらしい。それに結構頭も回るようだ。そんなお前が、エスパーというだけで今いったような立場にとどめられるのは、残念な話ではないか。——これがお前にとっての問題だ」

「……………」

「一方、エレスコブ家にとってみても、お前がエスパーのままではいることは、危険がある」

ウシエスタは、いうのである。「お前がエレン様の

護衛員としての責務を果たせば果たすほど、お前の第八隊における存在は大きくなる。そして、そのぶんだけ、お前のエスパー化によって戦列を離れたさいのマイナスも大きくなるのだ」

「……………」

「それが、さほどさし迫っていないときならともかく……………のるかそるかの緊急事態に、そんなことがおきたらどうなる？」

そこでウシエスタは一拍置き、からめた指をほどこいて、両方でのひらをテーブルに載せ、うしろにもたれた。「たとえは……………さし当たっては、カイヤツIIIでおきるかも知れない非常事態だ」

「カイヤツ……………III、ですか？」

「そうだ」

と、ウシエスタ。「お前も知っている通り、エレスコブ家は連邦登録定期貨客船をネイトIIダンコールから購入し、カイヤツIIIとして運航することになっておる。ほとんど完成していたものをあちこち仕様変更するだけだから、あと一カ月か一カ月半もしたら、カイヤツ一級宙港に来るだろう。その最初の航行には、エ

レン様もお乗りになるといつておられる」

「エレン様がですか？」

ぼくは思わず反問した。

カイヤツIIIが、その位の時期にネイトIIカイヤツに到着するであろうことは、ぼくも聞いていた。けれどもその第一回の航行にエレンも参加するというのは、初耳だったのだ。

しかし、考えてみると、それは充分にあり得ることであつた。いや、エレスコブ家の今後の方針が、イサス・オーノの指摘したような、そしてヤド・パイナンが大略は肯定したようなあの方向にあるのなら……………むしろ、エレン・エレスコブが真っ先に乗り込み、ネイトIIカイヤツ以外のネイトへの働きかけに赴くと想定するのが、自然ではなからうか。

「エレン様は、そうおっしゃっておられる」

ウシエスタはいう。「そうなれば当然護衛員も同行する。が……………そうした長期間の遠い世界への旅では、何がおこるかかわらん。何かがおこっても補充はきかないのだ。そこでの非常事態のさなかにお前がエスパー化して戦列を離れたら……………それがもとで重大な結果